

翻訳・翻刻

翻刻と解題『鵜坂集』上

‘Usaka-shu’ Part I: A Study of Old Texts  
Rewritten in Contemporary Language and  
Bibliographical Introductions

大西 紀夫

OONISHI Norio

書誌

底本 富山県立図書館中島文庫 上 版本 下 写本。

書型 半紙本 二冊。 縦22・3×横15・9（糎）。

表紙 朽葉色（中島文庫 上 版本）。

題簽 上、なし。「鵜坂集上 白推撰」と書き入れ。 版本（中島文庫）。

下、「宇左賀能杖（うさかの杖）」 版本（愛知県立大学付属図書館）

縦22・1×横15・5（糎）。

柱題 上、ウノ上（三七）（中島文庫）。

下、ウノ下（二六）（愛知県立大学付属図書館）。

序 上、越中州府城下ノ文奎堂白推撰（中島文庫）。

下、なし。

跋 下、「後序 蘭酔 享保七歳舎壬寅ノ臘月吉日」。

刊記 下、「京醒井五条上ル町ノ風月五郎左衛門寿梓」。

行数 序 每半葉八行。 本文 每半葉八行。

伝本 富山県立図書館中島文庫 上 版本 下 写本。

愛知県立大学付属図書館 下 版本。

天理図書館 上、下 写本。

月明文庫（石川県立図書館）上 写本。

鵜坂集上

鵜坂集之引

鵜坂神社 越中富山城西

于郊外鎮座也

祭八七月二十三日、昔八此日社人楯をもちて参詣の

女をうつしもとたちの祭りといひけるとぞ。 委八

古記に見へたり。 筑摩祭の事に似たり 「（一才）

鵜坂川わたる瀬おほみ我馬の

あがきの水に袖はぬれけり 家持卿

いかにせん鵜坂の森にみ八すとも

君かしもとの数しらぬ身は 俊頼朝臣

往古此神の此地に鎮座ましくて代々の風

雅に神威高く星霜を経る事久しといへ

ども和光の影千歳の今に新たなり。 僕 「（一ウ）

蕉門の末弟に列りて滑稽の正風に遊ぶ

こと十とせ余りならん。 ことし風煙に御

して旅泊に吟よふ事日あり。嘗茅茨  
を出る時に雅先生の馬の餞に硯を鳴し  
人々皆送りて深き情を寄す。往嚮往く  
に雅筵に臨むて英雄の土に謁入。

ことに崑玉の論を獲る事多し。此月  
此日恙なく蓬が宿に膝を容ぬ。是や

「(二才)

此神の楯をちからに万里をたどりし  
浅からぬ恵を賣してそのころを  
集に名つくる物歟。

越中州府城下

文奎堂

白推撰

印 文奎堂 印 白推「(二ウ)

縮柳

ころろは虚空自在の物にして広く

伸る物は大鵬を天地に放ち大樹を

無何の郷に植ふ。然るを狭く屈まる物の

意馬を方寸の内に苦めて斥鷃の蓬

蒿の間に飛んで至れりとおもふ類は

大雅に逍遙するの情に非ず。千劔破

神の代より玉銚の末に遊ぶ。旅といふ

「(三才)

物こそ風狂の人の魂定まる物なれ。

一步踏出すより境涯栄辱を離

れて平生八飽までに食ひ、温に着る

人も麤飯に飢を扶け莞席に夢をむ

すんで新に主君の恩を忝うし朋友

の信を知より或時は故郷に有母穉

風ノ涙と孝順の心頻りにある時八都鳥

我思ふ人八有やなしやと閨婦を悲も

「(三ウ)

和漢ともに天末の実情にしてかゝる哀八

居なからいづれかしらん。爰に風人白推此

水無月の火雲を凌ぎ、同土夕燕と伴ひ

神風や竹の都路に旅装ひす。猶その

先八湖南に赴き先師の廟にまふで、

皇都に遊び、青丹によし奈良の京

石上古き蹟を尋ね、浪華播磨瀉

和歌の浦浪かけて多く艸鞋を

「(四才)

費し果は尾城の月空庵に吟杖

を曳んと云。奇なる哉、此行白推常

に一里の道程に疲るといへどもいま

三月糧をあつむる事偏に風雅の

志気を励して暫く身を雲水に

投ずるもの歟。行も止まるも皆命

あれ八水村山落の仮寝も隙なく

てちかく馬頭を鷓坂川の邊り

「(四ウ)

に迎むと諸士と陽関の一唱をなす

享保壬寅晩夏日

鶯伯散者

二川稿

印 印

祖送

風薫れ誰か空蝉の旅の夜着

艸鞋はく日は鬼宿也青嵐

笠着るやはや都路の風薫る

ゆるやかに旅たつ笠やねり鶴

此旅や何處まで這ん瓜の蔓

気けはし山路の馬に雲の峯

汲とき八こちら向へし山清水

麦飯のそれも風雅の旅寝哉

野は涼し道の記あらん箱枕

つま立て見送る笠や夏の原

雨あがり笠にしらすや栗の雨

草鞋にしむほど八ぬれ夏の雨

羨し百日紅の旅寝とや

虎の尾の花や首途の足軽し

抱籠に化粧ひ脩八る旅人哉

あつさにもひるまぬ顔や鉄仙花

帷子に鶴の羽ぶしや雲千里

留別

袖の華の名残を味噌に待ンはや

蝉の音もさらバ峠の梢かな

六月六日叔粧し出て先五福山七面宮

を拝し日和申シく行記の毫を試む

龍の尾を谷へ曳なり夏の雲

羽丹生八幡社

名は朽ぬ埴生の書や金龜虫

俱利伽羅峠

凌霄の華や不動の御出現

前途三千里の胸のおどりも郷里を

去て六十余里

旅魂爰に定まる

はや旅の日もくりからや土用餅

しら根

嶺寒しどこへしらねの郭公

夏の清水にて

水島の水八かれても夏の清水

手とり川

水かれて鮎やひら打手取川

水無月や膝さへぬれぬ手取川

よめ落

鬼ゆりの心覗くやよめおとし

白推

夕燕「(七才)

白推

夕燕

白推「(七ウ)

夕燕

白推

雞刀

「(八才)

夕燕

白推

全

中河内に泊て

気づかひ八茄子の夢の旅寝哉

夕燕

若竹のとき八かき八や青幣

全

蚊帳にさす月を旅寝の涼哉

白燕  
「(八ウ)

住吉

松か根にわきつけて小萩哉

全「(九ウ)

柳ヶ瀬にて

雲水や閑にとがめバところてん

白燕

和歌浦

秋かぜに浪な浴ぞ鳥の跡

全

伊勢

御師家

太々や竹に涼しき日のひかり

全

よし野

稲妻に猶見返るや妹背山

夕燕

松杉の薫りも涼し二柱

夕燕

穂もまた酒に寂すよ葛の花

白推

朝熊詣

くま笹に風の應へや秋近し

白燕

灌ヶ端といへる山家に宿す。險阻に  
魂を奪はれいとゞ残暑のたへがたきに

困したるに灌水爽々と樹に響きて

一日のつかれを補ふ

「(十才)

水無月中頃北越の人々逢の境を

乙由

また残るあつさ砕や灌ヶ端

白推

たとりて内外宮に詣て給りしは

乙由

龍田

彼千里も踐の一步より始る成へし

乙由

木々にまた桧八わかし竜田川

夕燕

信心の奥や見へすく夏羽織

加常

南都

拍掌のひびく初や夏木立

加常

おどろくや十三鐘に鹿の夢

白推

涼しさを集てやらん籠枕

全「(九才)

うねめの柳

倂やひとゆりゆつて散柳

夕燕「(十ウ)

加常子明野のほとりまで

白推

さか中村

送らる。留別のこゝろを

白推

瓢箪のつるを釣手の帟帳哉

白推

小比丘尼に林檎投たる別哉

白推

籓の梅

六月十九日山田を出て京に行

八幡宮へ奉ル句

暁に二度のかけなり梅桧

全

名は今にさめぬ手がらや梅楥

夕燕

須磨

松ばかり今もむかしの月夜哉

全

いまも松八衣懸にけり蔦紅葉

白推〔十一才〕

一ノ谷

あら鷹の羽に雲散や坂落し

白推

此月どの秋霖に山川の鮎海に流入て魚網

の産となりたるこそ其時の様あ八れに

古戦場を悼

落鮎のすまや一あみ平家方

全

眺望

初川の橋にかゝるや淡路嶋

全

帆の数の屏風が浦や初あらし

全〔十一才〕

明石

漁舟の哀なる、おのが様々價をはたる

いきかひかまびすし

朝霧に蛸売声の訝かな

夕燕

あさがほのあだなる

ためしも千歳の今に名は残りて

葬の門やはかなく明離れ

白推

御影に宿す。おもへば遠くも来にけるかなと

侘たるに石穿切々ときこへて行旅

哀情の客となり。爰に始て慷慨の

〔十二才〕

おもひを振ふ

秋の底たゞくや石の御影山

白推

月出てみかけ八浪の千里哉

夕燕

高砂

事問んこゝに綿取尉と姥

白推

相生の松に秋なし諸白髪

夕燕

石宝殿

険路のさがるや石の蔦紅葉

全〔十二才〕

曾根の松

色かへぬめぐみはひろし神の松

全

野分にもえだをならさじ曾根松

白推

途中吟

辻堂やかくまで疲て鶏頭華

全

中秋の三日

月の都に遊ぶ

広沢のいよゝひろき月見哉

夕燕〔十三才〕

東山双林寺に会す

月もけふ雪と花との晴曇り

京 素六

名月やさそふ根のかつら面

范孚

東より嶺に箔おく今日の月

白推

いざよひいざと云名に都を出て

帰洛に赴とぞ

いざといふ袖にも有や月の影

素六

八月十六日京を出て

名護屋に赴く

〔十三ウ〕

十六夜や逢坂山の馬ざくり

白推

からさき

青氈に鳩の染てや松の色

夕燕

稲妻の先手かゝりや一ツ松

白推

湖南廟参

芭蕉葉に置余してや袖の雨

全

芭蕉葉や和らかに塚の前

夕燕〔十四才〕

八月十九日月空庵に着く。此地の雅庭に

遊ぶこと二日。居士の夜話に侍る事三夜

にして閑舎を出ツ。留別

蔓かれぬうちにさらばの瓢哉

白推

秋風に羽のつよきつばくら

居士

ひかゝと六具しめたる夕月に

羽重

末略

前書あり略之

落鮎のあがき水やうさか川

イセ 涼菟

旅の夢聞に来る身や秋の蝶

十竹〔十四ウ〕

与白推子書

吾子去年は予が旅行の因を結んで

老杖をとゞめ風雅を聞。ことし又

艸庵に來りて夜すがらかたり

終日会す。既にわかれにのぞんで

示すことあり。天あれば地あり、暑

迫ればかならず寒來る。俳諧も常を

いへば汚穢す。作好めば屈す。唯その二ツの

間に遊を実の風雅とは云なんめり

月空居士

露川艸

〔十五才〕

八月二十八日郷にかへりて

鵜坂の社に奉る句

露霜の笠にいたゞくしもとかな

白推

前輩鵜坂神社を稽し

同く勝概を詠ずる句

秋ながら蠅にあがくや雇馬

カゞ 句空

同道

稻喰て敲れにけり馬の尻

榎雪

乙亥夏

さらば鮎を川辺に出て眺ばや

雲水 惟然

同行

涼しさをわたる瀬多し鵜坂川

有磯 拾貝

戊寅秋

秋は此鵜坂や袖のぬれ次手

美濃 支考

庚辰夏

〔十六才〕

夏瘦の顔に紅葉や神の幣

加州 北枝

同行

春

華も匂へ鵜坂の神の瓜畠

全 文志

名護屋

同道

鷺の子を求食て舍る鵜坂哉

二川

葉を待て莊る気はなし梅の花

居士

癸巳秋

落鮎のあがき水やうさか川

イセ 涼菟

きれいにあそぶ島の正月

白推

同道

稲の穂で人敲けとや神の御意

野調

（十六ウ）

春風に冠下地のならばれて

兀山

乙未春

虎杖を折ばや神のしもにも

イセ 八菊

からみのきかぬ細ひ蕎麦切

桃川

丙申秋

鵜坂川秋の哀や子持あゆ

カ、 方石

在明の町へ七里は温泉本より

水明

辛丑秋

粥杖をおらさでうさか祭哉

月空居士露川

声にわかひも交る姥鳴

龜洞（十八才）

此神の楯の花や冬の梅

閨州（十七才）

新米の団子まろめて仏様

産れた左右を櫛子から云

羽重

神主の杖もひとつに踊かな

有節

涼風はそつも御座らふ南つけ

椿又

相伴に神子もいたゞく楯哉

百世

駒下駄だけに寄さゞ浪

白雲

楯とる手先や禰宜の大根引

烏焉

硝子の駕籠の障子を明捨て

推

河狩のひら瀬片瀬や鵜坂川

故白

二十余代は此ときの夢

明

若竹は神のしもとの林哉

盲人 蒲蛸

本尊は松かゝりて残る月

又

まつりせよつれなき人に櫛梔

渭竹

風すざましき臈の優婆塞

山（十八ウ）

嫂の尻もしもとのまつり哉

蘭醉（十七ウ）

何が鳴とはしらねども秋の声

洞

推

葬に鐘のひづみ猪口のわれ

士

天人の生れざかりや飛小蝶

二川

七日の齋にきりぐす鳴

洞〔十九才〕

酔人の胸から出てや朧月

白推〔二十一才〕

吹ば散遠親類は秋のかぜ

重

鶯や鏡のくもる息づかひ

桃扨

無尽やぶれてほそぐと月

川

七くさの始や奈良の七帝

ナゴヤ 栢風

甲がらで築た桑名の裏の町

明

むかし子をさらす野も有鬼助

全 兀山

絵にもいはれず薬看板

又

気ちがいの追るゝ風の柳かな

全 白雲

心底は隠しねた刃にさらぬ顔

雲

藍染のしずくたらゝ柳かな

野調

御前のめしに笛のひとふし

士

柳から直に水のむ鳥かな

一庸

静なる夜はいつのまに更るやら

推

落の芽や誰が紙燭の燃しさり

蘭酔

地蔵の松に見越入道

山〔十九ウ〕

注連はりて祖父が神楽や種おろし

閻州〔二十一ウ〕

あまりとはわやくいふ子を捨小船

又

燕の物見たけさや筐廻し

イガ上野 其水

万事は善と灰汁の洗濯

重

逆茂木やとある所に雉子の声

尾州サヤ 宇林

粥餅のきのふにけふの菜雑吸

川

梅の香に取つきしほや杉の門

筑前内ノ 助然

心なふ咲にも花の上中下

洞

白砂に三島曆の杉菜哉

ナゴヤ 鼻全

品定めする藪の百舌

雲〔二十才〕

若草に探幽が絵の野馬哉

一融

灌の瀬の藤からうつる柳かな

胡仲

黄舌や梅に美つくし善尽くし

僧 仙遊

じつとして雀もふくれ梅の風

加州 蘓守〔二十二才〕

雨風の角のおれたる柳かな

カヅ 樗兮

明るさを藪にかゝげる椿哉

全 尔来

おしめども春は留らで啼蛙

同松任女 千代

鎌形の土あたらしや初桜

魚津 倚彦

啼雉子の顔にしだるゝ柳哉

僧 直至

春の部

〔二十ウ〕

〔二十二才〕

おのが首の笏追ゆる雉子哉

ナゴヤ 居士

胡葱にかぶり振なり斗至雛

全 十竹

桃咲や畠の肌ぬぎはじめ

乙由

人肌に日のあたゝめて梅の花

イナミ 桃化

浅漬は紅梅の香にとられけり			謂竹	畠から魂いづるひばりかな			曾北
入相や三里さがりて藤の花	高岡	欽之		七種の雛やいまだ手くらがり	トマリ		松宇
印籠に解梅の箔や芥子雛	ヲツ	方救〔二十二ウ〕		柴山にかへてもまたん花の客			弁水
木の末 <small>つら</small> に小雨は青し春暮ぬ	長サキ	卯七		一冬の寒さは解て霞かな	少年	秀蘭〔二十四オ〕	
二の谷やふるきすれめの壺董	八カタ女	まん		菜の華や看坊もちの一構			白推
若水や氷はぐれて池の浪	江戸	関柳		出女のおちらへも寄ル柳かな			李反
糸延て若衆釣ばや鳳巾	ナゴヤ	排川		猫の子の乳をわすれたる柳哉			花融
片手には烏帽子かゝへつ若菜摘	全	素人		姑の気に入る嫩を柳かな			随風
藤咲や御手の糸から蛸薬師	全	心園		とり付て谷を覗くや岩の藤	ナゴヤ		風鳥
羽織着て尻つまげたる燕哉		有節		跡追ふて川の流るゝ汐干哉	生地		逸松
となりまでぞむるや桃の夕気色		素楓〔二十三オ〕		人先に関を越てや鳴雲雀	ヲツ		柳雨
初桜誉て帰るや鳥の色		卜道		鶉啼や鉛瓦におぼる月	全	蟻城〔二十四ウ〕	
つながれて鬼鹿毛眠る柳哉		故白		杏ぬぎておき所なし春の草	全	蘭七	
一日や空につられて鳴雲雀	生地	立花		鳳凰も一ト羽はぬらせ花のなみ	全	意聴	
種蒔やたはら藤太がもみ俵	同	柳翠		粥杖や順の拳にお乳の人		百世	
河上にしらぬ人家や若菜摘	滑川	休水		若餅の息や臼から浅間山	盲人	蒲蛩	
天上の交りはうしいかのぼり	ナゴヤ	常久		草木に順気の劑や昏の雨		和全	
世話にいふ物こぼさずや梅花	全	誰也		菜畠へ出るや雉子の宵まどひ		竹士	
庭訓に鳴うぐいすの初音哉	全	斗曲〔二十三ウ〕		鶯の藪に鳴日はものいみか		立志	
狭庭にぎつとかましや梅の華	全	謂流		塔堂に逢までもなし雉子の声	亡人	穉声〔二十五オ〕	
関守の目にかどもなし朧月	石動	左雄		若鮎や水に刃物の鞘走る		小字	
山ひとつあちら向せて桜哉	全	六旨		蝶々の私語聞たし花の宿		蘭醉	
まつもつて嫩が出初や梅の花	全	鷺洲		董摘背戸やむかしの伊勢かる		閨州	

移徒の庭に咲けり桜鯛

ナゴヤ 風野

鶯や汝おもへばくもる日も

全 朝尺

ひる中の夢見よとてや春の雨

ミノ大針 葉三

宝引の縄のみだれや軒の雨

善光寺 回山

花鳥の中に水させいかのぼり

イセ一ノ七梅風〔(二十五ウ)〕

山城の角をまるめてさくらかな

イセ 八菊

桃の華奥さまなりを咲にけり

同小侯 以上

蜂の巢やすはく動く夕嵐

三和

落さまの飛頭フクロクビかと椿かな

二川

定に入こゝろ引出す桜かな

禅衲 友鷗

春雨の瘠せをあらはず椿かな

全 柳梢

曲水に煮染を釣るや川向

ナゴヤ 三父

苗代や家の伝受の泥かげん

全 遊竹〔(二十六オ)〕

一二丁梢に廻るさくらかな

かゞ 維周

山吹の照りもとさるゝ日和かな

全 野洞

魚釣やそばにふらりと藤の花

ツルガ 東恕

末の世の宝あづけん遅桜

ミクニ 播東

青柳に誰蹴あげてや揚鶴

越高田 巻耳

内儀ともならで裏屋の柳哉

石動 蛙曰

から堀に雨ほし顔や藤の華

全 麿従

尺八につなづきおとす鶴哉

全 方豎〔(二十六ウ)〕

海山をあへたる風の柳かな

氷見 海人

傾城につくばわせたる柳かな

カ、 布荃

新らしき雲引出せよ初桜

全 野角

鶯や梅と竹とをそゝのかし

全 幾因

いたづらや築地のり越又藤の花

ナゴヤ 松波

日の人をしゃくり上てや鳴雲雀

全 千里

疵のないぬり砥の上や朧月

カ、 宜令

まゆはきに似た八づれなし鬼筋

蘭翠〔(二十七オ)〕

春の鳥羽二重すへる柳かな

遊之

しまつして年を越たか梅の花

白推

かみあてる海老に念仏や海雲汁

ナゴヤ 推扣

青によしならの京より蓬餅

全 此由

夏

伊勢

ふりかえる風の薫りや二見瀧

白推

蝉の間をはなす松陰

加常

置ともあらふに斧ノキをまたがせて

乙由

今二こねを塗たらぬ壁

八菊

うそくくと暮行月に星はまだ

万里

紅葉の時に桐は葉もなし

推〔(二十八オ)〕

鉄砲の相手にならぬみそざとい

常

〔(二十七ウ)〕

乳でだまさるゝ殿はしやす

由

賢こげに先へ来たれば村時雨

北

言伝のまはりとをさに硯管

菊

くれぬやり手の尻の重さよ

由

中に四五枚無事な南京

里

どこへやら宵の匂ひは逃て行

里

山科に暮したもはや一むかし

推

虹さへたてばまた日和也

推

是から海をのむように見る

常

遅かげに澄し切たる嶺の花

菊

荷負ふにはあまる馬にはまたがらず

里

春の調子の鳥にそなはる

執筆〔三十才〕

門跡様の盆の寥しさ

曾北〔二十八ウ〕

入がたの月にたとへて身を恨み

由

琴を枕の夢もひやくか

推

すへて来る料理に花の露散て

北

夏の部

〔三十ウ〕

不審のはれぬ塩に山吹

菊

風の香や立枝も見えず藪の中

江戸 衰杖

手拭を笠に干たる春の空

常

帛ぬきの日や鮫鱧のつるし切

ナゴヤ 香水

折角待ておれば余の人

由

橋姫の人静りてほたるかな

全 鷗白

その糸の三輪も麩と聞からに

菊

筭と立や夜半ののぼり竿

野調

裏を見せたる風の縁り取

里〔二十九才〕

脱からに蟻のいかはる暑かな

蘭醉

きりぐす更行秋を鳴からし

推

風鈴に文の字すはる暑哉

湖中〔三十一才〕

鶏頭ばかり仏あかれふ

常

夏草に妻もこもれる雉子の声

乙由

残る月沸た所へ飲に出る

里

鯉啼河や鯰もおりながら

ナゴヤ 林子

仕合よしの鞍に腹当て

北

その羽ねに間動して飛蛩

蘇守

嗜のゆだんにしれる老女房

由

鼻息の雲にとゞくや瓜作り

二川

なみだと汗のおつる頤

里

涼しさや衰ははなさで渡し守

閻州

丹塗の華表はいつの時代から

常

蜩に猶ふりの付たる暑かな

カゞ 荷風

爰も煮売の鑑抜た跡

菊〔二十九ウ〕

山の襟野は裾ながき若葉哉

生地 管五

帛ぬきやいかなる敵に組ふとも	全	枝仲	〔三十一ウ〕
灌仏や天もならくも此通り	ナゴヤ	風埃	
草木の露に生根や飛虫	全	羽重	
麦秋に装束あつき案山子哉	白推		
河骨の花やめつきの七度焼	僧	一空	
貧富をあらそふ軒の幟かな	全	卜道	
ひる顔や茶店の餅買フ馬の上	烏焉		
形代や小麦のからの盲ラ馬	ナゴヤ	亀洞	
はつ蚊帳を雀の覗ク朝寝哉	全	氷虫	〔三十二オ〕
投上て馬に踏るゝ田草かな	仙角		
脇差も生血かく世や冲膾	全	水明	
夕顔はよそに這さへ哀なり	小松	宇中	
一国を鎮めて寝たる紙帳哉	高岡	欽之	
涼しさや水に追るゝ水の色	全	蘭水	
帛子着て流た川に涼かな	魚ツ	雨村	
布施受ぬ寺や仏とかんこ鳥	百世		
恋病のうき名や立ん羽抜鳥	渭竹		〔三十二ウ〕
夕顔にあつひ日影は隠れけり	一融		
金鰐の稲妻うつる裕かな	故白		
兀山の一木便るやせみの声	イガ上ノ	魚曰	
楼閣に雲散来るや桐の花	作ツヤマ	等年	
空も実困ひれつゝや五月晴	八カタ	未雷	
咲知恵の余て散か芥子の花	吾仲		

先陣の名に呼るゝや初真桑	ヲツ	朋云	
散る芥子やまだ咲種こぼれ足	全	從意	〔三十三オ〕
竹の葉を落てそもゝ蝸牛	野泉		
象潟や夕顔棚を出る小松	亡人	方石	
汀から我にはねなし郭公	逸松		
紫陽艸にくせの付たる昼寝哉	石動	眉泉	
若竹の露や硫黄の遠あかり	ナガサキ	宇鹿	
鋪芝の庭や手畜の蝸牛	ミノ高ス	素切	
日ぐらしに松葉かく子や伊賀海道	同フカタ水尺		
雨風の公界もいまだ若葉かな	生地	扇之	〔三十三ウ〕
粽結ふ袖は露けし小笹はら	松宇		
市中に枕崩るゝ真桑かな	魚ツ	丈風	
分別の間を動く団扇哉	糸井川	煦竿	
蚊帳つりて先待物や杜宇	直江	過角	
涼しさや居止ず障子の影帽子	カゞ女	紫仙	
橘や鼠つかひのそでの中	ナゴヤ	推之	
夕顔やあつき化粧ひの旅籠町	全	露竹	
乳の味を思ひ出せる覆盆子哉	素楓		〔三十四オ〕
うなぎにはならせまいとやとろゝ汁	一致		
蝙蝠や羽織ひとつの日影もの	花融		
蚊ばしらに立や夕日のごみほこりナゴヤ	梅風		
短夜やきのふのえだにもの鳥	居士		
少将に心つよしや百合の花	木曾二へ川	五梅	

扇子売土用を質に置にけり	松本	太河
ほととぎす人も寝させず我も寝ずイナミ	林紅	
雨乞に水うて笹のかたつぶり	ナゴヤ	和雪「(三十四ウ)
ほととぎす一ト谷鳴らす初音哉	上州イセザキ北之坊	
藪の時涼むだ風の団扇かな	貫器	
田も畑もひとつ成て暑かな	不及	
木兔の機嫌そこなふ行々子	亡人	秀尹
弁当を烏帽子に入て祭かな	ナゴヤ	可中
南天の華や雀の鶯やすめ	信松本	蟻道
酔好ミの猿とや老の衣更	イセ一ノ草風	
月影や青田の外は水に箔	朋云「(三十五才)	
喰しまふ跡は粽の落葉かな	蘭七	
琵琶弾て聞せよ爰に浅茅酒	小松	左上
麦刈や娑婆へ出世の六地藏	柳雨	
五香湯に金の光や仏生会	滑川	野雲
伽羅の香の中に一筋蚊遣かな	卜道	
唐人の小ゆひ烏帽子や杜若	有節	
からかさの梢ともなし郭公	イセ	万里
泉水を汲ほす照や凌霄華	同四日市	砂水「(三十五ウ)
白鷺も跡から行や田植笠	雨夕	
頃日は生絹も重もき清水哉	和全	
灌仏やその産やには鯛鱸	白推	
郭公啼や左右の山高し	小松	貝紫

白浪の夜はおそろしや菱の花	ミクニ	還露
捨子かと思ればさてなし麦の秋	ナゴヤ	右柳
から船をゆすりて鳴や行々子	全	曉井
松柏逆縁ながら落葉かな	四日市	周行「(三十六才)
月光の中を流るゝ鷓川かな	富山八尾	竹風
酔はまだ残る目元や合歡の花	白推	
まだ宵の恨解ずや合歡の花	蘭醉	
百八の鐘細長し五月雨	ナゴヤ	己百
涼風の角をたてけり心太	四日市	杉高
冠なら何なら蝉のから衣	カ、	幾弾
夕立に片荷の塩の雫かな	遊蝶	
水のたる雲に降りり栗の花	ナゴヤ	玉丈
それ〳〵に名乗て出る若菜哉	女	千代
人魂の転じて飛や郭公	ナゴヤ	之楓
浦島のあけてからしや二夜酒	全	氷文
干瓜に帆懸て遊ぶ子共哉	弁水	
さみだれにぬれぬ物あり芥子坊主	蘭水	
蓴菜の葉は小仏の涼かな	一庸	
張笠や脩子に成な柿の花	二川	
竹の子や親は空にて風の音	加常「(三十七才)	

(平成23年10月31日受付、平成23年11月11日受理)

